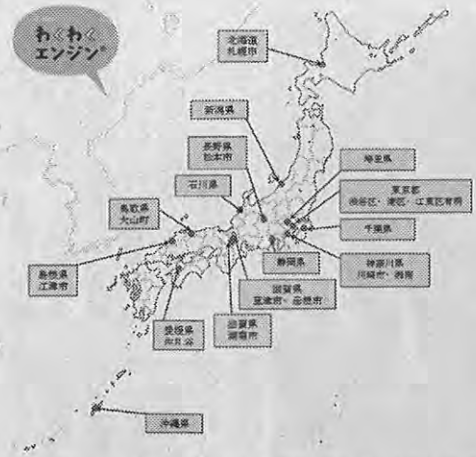
2019.7.8 教育新聞

第1回

「わくわくエンジン」の発見

突然ですが、読者の皆さんは毎日わくわくした気持ちで仕事していますか？ 人生はもちろん、毎日の生活の大きな部分を占めるわけですから、わくわくしながら仕事できたら幸せですよね。

私たちキーパーソン21では、18年間にわたり「どのようにすれば子どもが主体的に考え動く人に育てることができるのか」という問いと向き合ってきました。そしてこの問題は、子どもの成長段階における育むべき最優先事項であるがゆえに、関わる多くの大人たちの重大な悩みの一つでもあるようです。私たちは、解決の鍵として「わくわくエンジン」を子ども一人一人から丁寧に引き出し、それを生かした教育の実践を提唱しています。



「わくわくエンジンの発見」から始める

考え方やメソッドは、北海道から沖縄まで全国に広がり、学校、PTA、行政、大学、企業、NPO…などさまざまな団体と連携することで、学校を中心としたまちづくりや、生きづらさを抱えた子どもの意欲醸成の手段としても活用されています。この連載では10回にわたり、わくわくエンジンに気付くことから一人一人が主体的に考え、行動するようになるという話をしていきます。

日本全国で実践を進める

「わくわくエンジンって何だ？」と思う方もいるでしょう。わくわくして動き出さずにはいられない原動力のようなものです。大人も子どもも、誰でも必ず一つは持っています。自分の心や体が素直に向いて、自然と動き出してしまうような、たとえくじけても、もう一度工夫したり頑張ったりしたくなるような、一人一人の中にあるエネルギーの元です。

子どもと向き合い成長に貢献する教師という仕事は大切で素晴らしいものです。誰もが一度はなってみたいと思ったことがあるのではないでしょうか。とはいえ、毎日の授業、絶え間ない行事、気が抜けない子どもとの真剣勝負、日々起こる思いがけない事件、保護者との連絡、職員室の人間関係、テストの丸付け、書類作成――と仕事には終わりがなく、理想の教師像と現実は違った、と思う方も少なくないかもしれません。

そんなとき、ちょっと立ち止まって考えてほしいのです。「何で先生になろうと思ったんだっけ」「先生という仕事のどこにわくわくエンジンがあるのだろう」、そして「自分のわくわくエンジンって何だろう？」と。日本の教育の中核を担う教師にこそ、ぜひわくわくエンジンを発見してもらい、日本中の教師にわくわくした気持ちで仕事してほしい。そう思っています。

【プロフィール】
あさやま・あつこ　認定NPO法人キーパーソン21代表理事として、「一人一人のわくわく」から主体性を引き出すキャリア教育を全国で展開中。開発したプログラムは2016年、経産省主催「キャリア教育アワード」の中小企業部門で最優秀賞を受賞。著書に『ふつうの主婦が見つけたやる気のエンジンのかけ方』（高陵社書店）。

第2回

未来を一つの職業につなげる危うさ

「わくわくエンジン」が分かると、自分のエネルギーの行き先が見いだせるようになります。では、子どもがそれを見つけたとき、大人はどういった対応をすべきでしょうか。今回は具体的な例をお伝えしましょう。

川崎市の中学校で出会った生徒のエピソードです。わくわくエンジンを発見する実践プログラムを進める中、3人の生徒が「野球」にわくわくする、と言いました。いずれも、なかなかの強豪野球部で活躍しています。大人は彼らに「いいね。将来は野球選手になれば」などと勝手なことを言います。すぐ職業につなげようとするのです。

そう言われた彼らは「野球選手いいかも。なりたい。めっちゃいい！」と夢を描きます。懸命に野球に打ち込んでいる今の自分と、プロの選手として活躍している将来像が重なって、自身と社会もつながります。

しかし残念ながら、誰もが野球選手になれるわけではありません。彼らは中学、高校、大学時代を過ごすうち、どこかで「俺、野球選手になれないかも」と気付きます。野球に打ち込んでいる自分と、プロ選手として社会的に認知され、活躍しているはずの自分をつないでいた糸がぷつんと切れてしまうのです。そのとき、子どもはどうしてよいか分からず「どうせ俺なんて」「やる気ないし」「やりたいことなんてない」「別に」――と後ろ向きな言葉を口にしてしまいます。

私たち大人は、子どもの未来をたった一つの職業につないでしまうことに潜む大きな危険を認識しなくてはいけません。大人は自分の情報のひきだしから精いっぱい思い付く職業名を口にするわけですが、たとえ良かれと思って掛けた言葉であっても、その子の人生の可能性を狭めることにもなりかねないのです。

思い付きでその気にさせるのではなく、子どもの中にある本質的な意欲の源泉を引き出すのが大人の役割であり、大人の方こそそのような関わり方を学ぶ必要があると思うのです。では、どうすればよいのでしょうか。次回説明しましょう。

2019.7.15 教育新聞

新たな時代のキャリア教育

明山あつこ

第3回 子どもの内面を捉える視点

前回、野球にわくわくすると答えた3人の中学生の話を紹介しました。彼らA君、B君、C君に、それぞれわくわくする理由を聞いていきます。

A君は「作戦や戦略を立てるのがめっちゃ面白い」、B君は「チームで勝ったり、みんなで立てた目標を達成するのに自分が役立ったりすることがうれしくてしょうがない」、C君は「素振りや筋トレをして、自分が日々成長しているのを感じるのが楽しい」と言います。

表から見ているだけでは分からない、子どもの心の中や考えが彼ら自身の言葉として発せられると、「なるほど、そうだったのか！」という気持ちになります。私たち大人が一人一人と向き合い、彼らが野球に打ち込んでいる理由や「わくわくエンジン」を理解する視点を持てたとき、子どもたちの成長をより良くサポートし、可能性を引き出すことができるのです。

例えば、担任教師に「今度の体育祭、騎馬戦で隣の組に勝ちたいね。どうやったら勝てるか作戦を立ててくれないか」と持ち掛けられたとしたら、A君は騎馬の組み合わせをどうしようか、大将を誰にしようかと、張り切って考えるでしょう。もし、A君の作戦で見事勝つことができたら、彼は学級の中でヒーローになれます。たとえ負けたとしても、作戦を立てて頑張ったことを学級の中でたたえることができます。授業や行事、学級づくりなど、教師はどんな場面においても「作戦や戦略を立てるのが面白い」という子どもの活躍の場をつくることができるのです。

大人はとかく、走るのが速い／遅い、計算が速い／遅い、テストの点数がいい／悪いなど、「できる／できない」の軸でものを考えてしまいがちです。ですが、そうした外からの評価の視点ではなく、一人一人の内面にある「わくわくエンジン」を理解できれば、子どもがわくわくしながら夢中になって取り組む成長の機会を提供できるようになるのです。これは、学級の一人一人を毎日見つめている教師だからこそできる特権なのです。

子どもの中にある大切な思いを引き出し、認め、日常生活の中で生かすことによって成長の機会を提供できる教師が増えれば、どんなに多くのすてきな学級や学校をつくることができるでしょう。

【事例】同じ野球でも、わくわくする理由は違う！ Key Person21

	A君	B君	C君
わくわくするもの	野球		
わくわくエンジン	作戦や戦略を立てること	チームで何かを達成するために自分が役に立っていること	日々の小さな成長を感じること

同じ野球でもわくわくする理由は違う

第4回

なんで勉強するのか

子どもに「なんで勉強しなくてはいけないの」と問われたら、あなたはどう答えますか。「君のためだよ」「将来のために備えておくんだ」「人の役に立つ立派な人になるためだよ」――といったところでしょうか。

けれども、実感の伴わないことを言われても、子どもにはぴんとこない。それで「主体的に勉強しよう」とは思いません。何のために勉強をするのか、答えは一人一人の子どもの中にあるからです。

「れお君」は、自らその答えを見つけ、意欲を持って人生の進路を決めた子です。

彼は中学3年生のとき、私たちが運営する学習支援・居場所づくり事業の学習会にやってきました。当時は通知表が1と2ばかりで学習習慣もありません。学習会に来るのも終了時間の5分前という状態でした。

そんなれお君にも、わくわくエンジン発見の日がやってきました。私が「どうだった」と聞くと、こう話してくれました。

「めっちゃ自分に感動した。僕は幸せな家庭を築きたい。そのためにお金を稼がなくてはならないことは分かっている。でも、どうせ働くなら好きなことを仕事にしたい。僕は小さい頃からものをつくるのが好きだった。何かものをつくる仕事がしたい。建築に関する仕事がしたい。建築科のある学校に行って資格を取りたい、勉強したい」

そのとき、れお君には自分のエネルギーの元と、そのエネルギーの向かう先がはっきりと見えたのです。神奈川県内で建築科がある定時制高校を目指して勉強を始めると、成績はぐんぐん伸び、最終的に建築科がある全日制高校に見事合格しました。

彼はこれまでずっと「中間試験があるから勉強しなさい」「宿題出さないと内申点が下がるぞ」「このままだと高校行けないね」と不安をあおるような言葉で、勉強するよう促されてきました。しかし意欲は湧かず、自己肯定感も下がるばかりでした。

わくわくエンジン発見の際、れお君は初めて「勉強は、人から言われたり外からの圧力でするものではなく、自分の中から湧き出る、学びたい、こうありたいと思う気持ちからするものなんだ」と気付いたのです。感動のあまり彼は「そういうことか」とつぶやきました。

わくわくすると人は能動的になる。自分のわくわくエンジンに気付き、真の目標を見つけたときにこそ意欲が生まれることを、れお君が証明してくれました。